

こちら特報部



「ジャパン・ミャンマー ネットワーク キズナ」を設立。現地の農産品加工会

で、太陽光を活用する「ソーラードーム」を建設。建設費は五月二十日まで約一

こうした状況だからこそ、モウマカさんは事業を軌道に乗せたいとし「ドリーム

月十日に開設される。アドレスは、<https://nature.levajinn.com>

二丁の追跡

根拠の市町村線量に疑義

東京電力福島第一原発事故後、被ばくの健康影響を議論してきた福島県の専門家会議で今月、最新の分析結果の原案が公表された。これまでと同じように、福島県の若者の間で見つかる甲状腺がん和被ばくの関連を否定した一方、専門家会議として正式な見解をまとめるに至らなかった。県としては東京五輪に合わせて「被災地の今」を世界に発信したかったはずなのに、議論が深まらなかったのはなぜか。

(柳原崇仁)

福島県の専門家会議

に取組みとめた一方、現部会員の任期は七月末までのため、今回の会合でまとめに入ると思われた。県側が示した「結果のまとめ」は、新しいデータを反映していた。

三月公表の国連科学委員会(アンスケア)二〇二〇年報告で示された市町村別の線量を使った一方、県のがん検査の結果から市町村別の受診者数、がん発見数をピックアップした。それ

らを踏まえ、線量に応じて県内市町村を四グループに分けた上、線量が多いほど、がんが増えたか分析した結果、相関関係は認められないと判断した。

ところが、ビデオ会議システムで開かれた部会は、議論の入り口でつまづいていた。分析結果うんぬんの前に分析用のデータに対して質問が相次いだ。

関連ないと繰り返してきたけれど...

「がん和被ばく」中間報告見送り

二十一日に福島県が開いた県民健康調査検討委員会の専門部会。「結果のまとめ」と題した文書が県側から配布された。繰り返して登場したのが、事故後に見つかった甲状腺がんと甲状腺被ばくの関連は一認められなかった」という記述。この文書をたたき台に議論を深めると思いきや、肩透かしの展開が待っていた。



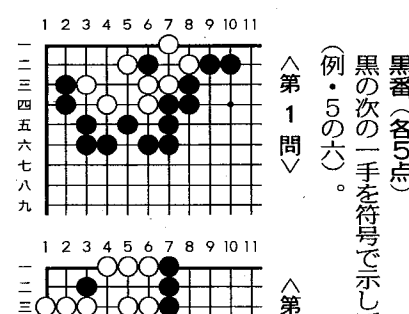
問題は、アンスケアの二〇年報告で示された市町村別の線量だった。最高でも三〇μSvだが、実態に即すのかという問題があった。甲状腺被ばくは放射性ヨウ素が呼吸や飲食で体内に入った後、甲状腺に集まって放射線を出すことで生じる。ただ、アンスケアは独特の前提に立っていた。

「日本人はコンプを多く食べる」「コンプは放射線を出さない安定ヨウ素を多く含む」「普段から甲状腺に安定ヨウ素が集まる」「放射性ヨウ素が体内に入ると甲状腺に集まりつづらる」という具合だ。

県側の回答は「日本人は尿中の安定ヨウ素が一瞬中三〇μSvとされてきたが、がん検査の受検者の多くは百μSv台だった。言われるほどコンプを口にせず、尿中の安定ヨウ素も少なかったことを示唆していた。

さあ! 段位挑戦

第25回問題



黒番(各5点) 黒の次の一手を符号で示し(例・5の六)。

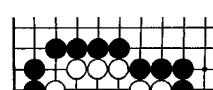
第24回の解答 正解B

大場はほとんど打ち終わり、並面のように見えます。下辺が広ですが、右下の白と左下の黒が共にそれほど急ぎません。焦点は上辺です。左辺の黒が全

囲碁

詰め碁

出題 九段 石田 章 【ヒント】黒先。ナカデで仕留める。(10分で、初段)



こちら特報部

1人ごとの数値 必要なのに…

問題は他にもあった。アンステアは四十の避難パターンを想定して市町村別の線量を導いたが、実際は十万人規模で避難した。避難開始時間や経路が四十通りで収まるはずもない。

やはりざっくり導いた線量ではなく、個人ごとの行動に即した線量、それを集約した線量別の人数分布が必要だ。その上でがんの人の線量を踏まえ、線量別のがん発見率を分析できれば、被ばくごとの関連がより正確に判断できるはずだ。

結局のところ、「結果のまとめ」の元データになったアンステア二〇年報告の線量では不十分と目され、中間報告の取りまとめには至らなかった。コンプの摂取状況を含め、当時の個人ごとの生活や行動に即した線量を基に議論を深める必要性が指摘された。

県は全県民を対象に問診票を配り、事故直後の行動調査を行っているため、今回の部会では、この行動調査を基に個人調査を割り出した上、これからの分析に

正確な把握 もはや困難

生かす方針が確認された。とはいえ、個人線量を正確に導くのは至難の業だ。

線量評価を専門とする弘前大の床次真司教授は、これまでの取材に「個人線量を計算で導く場合、仮定の置き方次第で簡単に「桁変わる」と語っている。

甲状腺の被ばく線量を計算するには、▽どこにどれだけ長時間いたか▽それらの場所で放射性ヨウ素がどれだけ舞っていたか▽呼吸で放射性ヨウ素をどれだけ取り込んだか▽体内に入った放射性ヨウ素が甲状腺に集まる割合がどうか―などの情報が必要だ。

これらについて正確な情報を集めるのは大変だ。「どこにどれだけ長時間いたか」は、県の行動調査でつかむことになる。しかし問診票の本格配布は事故から半年近くたってから。被災した人たちがすっかり記憶して記入したかは微妙だ。

さらにポイントになるのが呼吸の状況だが、国際放射線防護委員会（ICRP）の文書によると、軽作業時は睡眠時の三倍、重作業時は七倍、体内に取り込む空気量が多い。「その時に何をしていたか」を捉え間違えると、空気を吸い

「被災者が納得できる議論を」

込むことによる放射性ヨウ素の摂取量は実態から乖離する。しかし当時の行動は被災者の記憶頼みになるため、正確な把握は難しい。体内に入った放射性ヨウ素が甲状腺に集まる割合はコンプを食った程度に左右されるようだが、やはり当時の食生活を被災者に思い出しってもらう必要がある。そんな事情を踏まえる

か調べなかった。放射性ヨウ素は半減期を繰り返して消えたため、もう測れない。リスコムユニケーションに詳しい大阪大の平川秀幸教授は「本来はまず、分析に用いるデータをきちんと検証し、どんな問題があるのか明らかにする必要がある。そうせずに分析結果をまとめて「これが正しい」と言われても、信頼できない」と指摘する。

「おそろしくこうだった」と仮定するしかないが、「おそろしく」ゆえに実際と差が生じうる。本来なら、事故直後の段階で体に測定器を当て、放射性ヨウ素が甲状腺に集まった量を測測すべきだったが、政府や県はサボり、千八百人し

した人たちが納得できるよう、疑問の数々について議論を重ねることが必要ではないか」と述べている。

リスクメモ

事故直後の多くの重要データは、もはや今となっては取り返しのつかないものばかり。結局、断片的な情報に基づき推計議論を重ねるしかないが、その前提にコンプの三段論法みたいな話を持ってこられても、首をかしげるしかない。ゆめゆめこれで「原発は安全だ」と言っなかれ。(歩)

2021.6.27



- 福島県側から示された「結果のまとめ」は以下の通りであった。
- UNSCEAR による推定甲状腺吸収線量は、理論的な計算による事故である。
- UNSCEAR による推定甲状腺吸収線量と甲状腺がん（疑いを含む）は以下の通りであった。

① 集団避難する福島県飯館村民ら。2011年3月19日、栃木県内で

話題の発掘



佐佐木幸一

久しぶりに和柄の小雨がいいね針もつ
東京都中野区
(評) 自分用のいる場面。縫い雨の日が似合うど。

懐に雉を鳴かせて里を木木の茂れる
群馬県桐生
(評) 青葉若葉る初夏の里山で、ないがその山の、いる雉の声。

小澤 實

偏西風のもたらす浪アー多き鎌倉高校前野
神奈川県秦野市

月蝕は雲の中なり髪
神奈川県茅ヶ崎市